
スウィートLOVEバレンタイン

桜草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スウィートLOVEバレンタイン

【Nコード】

N6575D

【作者名】

桜草

【あらすじ】

バレンタインウィークの連載です。コナン×蘭、佐藤×高木、歩美、コナン、平次×和葉、コナン×哀、新一×蘭のカップリングの各短編を中心に連載しています。（一度、何回も同じ話が投稿されたエラーがありました。《泣》ご迷惑をおかけしました！

A M 6 : 0 0

朝起きると、陽射しがカーテンいっぱいに溢れていた。
時間はもう朝だ。

おっちゃんはまだ寝ている。

えっと・・・今日、何日だっけ・・・

カレンダーを見ようとした瞬間、蘭が駆け込んできた。

「おはよー！コナン君。今日は何の日だか知ってるー？」

「あ・・・バレンタイン・・・。」

「そうそう、当たりー！！」

必要以上にのりに乗ってる蘭を見て、少し呆れてしまった。
バレンタインってそんなにいいもんかよ・・・。

確か工藤新一の時の高1では、ざっと靴箱から溢れるくらいもらった。

それから一週間、蘭にはジト目で見られて結構大変だったんだぞ・・・！

ま、いつも蘭がくれるのは・・・『幼なじみ』としての義理チョコだったけど・・・。

「はい、これヤイバーチョコ！コナン君ほしがってたよね？」

「あ、うん・・・。ありがと、蘭姉ちゃん。」

仮面ヤイバーがでかく写っている箱を見る。

ハア・・・小学生の俺にはこんなけつたいなお菓子か・・・。

早く大人に戻りてえ・・・

「コナン君はモテるから、チョコレートたくさん貰って来ちゃうよね！」

その言葉から去年のバレンタイン、蘭に言われた冷たい言葉を思い出す。

『 新一はモテるから、チョコレートはたくさん貰うんでしょ？ 』

何で今年だけ、チョコレートをくれないのかと聞いた時だ。

今思うと・・・本命チョコレート以外やらないという、蘭の決意だ

ったかもしれない。

照れて渡せなかったのかも・・・

じゃあその時は・・・蘭は・・・俺のことを・・・。

「どうしたの、コナン君？顔赤いよ・・・熱でもあるの？」

「なっ何でもないよ！ーじゃあ僕、学校行く準備しちゃうね！」

あわただしい朝。今日はバレンタイン。

t a k a g i / s a t o u

A M 8 : 0 0

「ちょ、ちよつと何なのよこれは〜!」

2月14日、警視庁捜査一課は今日もあわただしいスタートだった。

一課のアイドルの佐藤美和子は『男よりもかつこいい』。

なので美和子ファンのオジサンたちだけではなく、女にもチョコレートを貰う。

なので来た時は机の上が、チョコでいっぱいになっているのだ。

「ちよつと高木君、このチョコかき集めるの手伝ってくれる? 大変なんだから!」

「あ、はい」

自分が呼ばれてつられて返事を言う。

チョコレートは結構な量があった。

それでも仕事が始まる前に、集め終えた。

「ありがとう、高木君！」

「いえいえ！えっとその・・・さと・・・」

「あー白鳥君！これ義理チョコ！いつも貰ってばかりで悪いしね！」

「いえ・・・僕の気持ちですから・・・（結局義理ですか・・・）」

さつさと彼女は用がすんだとばかりに、仕事場へ行ってしまった。

ちよつと佐藤さん！まさか僕のチョコはないんですか！

あれ？俺なんか悪いことしたっけ？・・・ちゃんとカラオケも付き合ってるし・・・

悪いことした覚えはないんだけど・・・

・・・はあー去年みたいに・・・由美さんの義理チョコだけが貰ってこよ・・・

「あー高木君！これこれ、デパートで買ってきた義理チョコ！感謝してねー！」

「あ、はい・・・。」

何かへこんでいるようだ。直接、用件を聞いてみる。

「何落ち込んだるのよ！で？美和子からは？」

「え．．．いや何も貰ってませんけど．．．．。」

「嘘！あーまた何かやらかしたわね？」

「そつみたいですね．．．。」

あれ？おつかしいわね．．．。

美和子張り切ってチョコ作ってたのになあ．．．。

「ま、いいですよ．．．どーせバレンタインなんて、自分でチョコ作って食べればいいんですから！」

「ったく．．．現実的ね。はいはい、勝手に一人で怒ってなさいよ！」

「．．．いや、怒ってなんかいませんけど．．．ハア．．．」

だいぶ落ち込み気味だ。

さっさと追い出して、美和子のところへ。

「・・・何？」

「何ってもう！愛想が悪いわね！ちょっと聞きたい事があるんだけどさー」

「友チヨコならもう渡したはずよね？」

何ごまかしてんのよ美和子！

私にはバレバレよ！

「そうじゃなくて！何で高木君にチヨコあげないのかって聞いてるの！」

「・・・！」

顔色が変わった。

明らかに動揺している。

あれ・・・なんかヤバイこと言っちゃた？

「失敗しちゃったから・・・」

「え？」

「せ、せつかく手作りチョコ作ろうとしたのよ！！なのに砂糖と塩を間違えて入れちゃって！うっかりよ！うっかり！」

真つ赤になつて言いまくる美和子はさすがに迫力ある！
写メ取りたいくらい・・・！！

「・・・なんだ、そんな事？だつたら適當に買えばいいんじゃないの？」

「そういう分けにはいかないでしょ！・・・だつて・・・。」

「だつて何よ？」

問い詰めてみる。

冷静な美和子の対策は、『高木君を使うこと』。

「分かったわよ！もう・・・適當に買つてきて適當にあげればいいんでしょ！」

あげたくないわけじゃないんだから！」

まったく・・・いい加減素直になりなさいよ・・・
失敗したのだつて、高木君はきつと大喜びするはずよ。

苦い朝。今日はバレンタイン。

c o n a n / a y u m i

A M 9 : 0 0

「コナン君！私のチョコレートあげる！」

「あーズルイ！アタシもよー！」

あーあ。やっぱりコナン君はもてるなあ……。歩美も一生懸命作ってきたのに！いつあげよう……。

窓際でしっかりと見つめる。

目の前の彼を見てそう思う。

周りには女の子たちが群がっていた。

とてもじゃないけど渡す暇なんてない。

「吉田さんは？」

「わあ哀ちゃん！びっくりしたあ。」

「吉田さんは彼に渡さないの？」

彼女の言葉にドキツとした自分に焦る。

そつだ・・・急がなきゃ・・・早くコナン君に渡さないと・・・。

「うつうん！そつだね・・・。ねえ哀ちゃんはコナン君に渡さないの？」

「え？」

「コナン君のこと・・・どう想つてるの？」

顔を逸らす彼女を見つめる。

流れる赤みがかかった茶髪、切れ長だが大きい瞳、どこか寂しそうな表情。

物凄く綺麗・・・。

「別に江戸川君のことは、仲間であること以外なんとも思つてないわよ。」

「哀ちゃん・・・本当にそつなの？」

「ええ・・・安心して。誰もあなたの彼なんか取らないわ・・・。」

真つ赤になつたのは自分でも分かる。

「私はあなたのことを応援するわ。」

気持ちがフツと楽になる。

静かに笑って正面を見てくる親友に、精一杯笑った。

「ありがとう！哀ちゃん！」

「そんなことより、早く彼に渡しちゃいなさいよ。他の人にとられてもいいの？」

「やつやだ！歩美、負けない！」

相変わらず女の子たちに囲まれている、彼の方へ行く。

「コナン君！いつもありがとう！これ、歩美からのチョコだよ！」

「ああ、ありがとう歩美ちゃん。」

コナン君・・・笑ってくれた・・・。

歩美のチョコが一番おいしいんだからっ！

大好きだからね、コナン君！

明るい朝。今日はバレンタイン。

h e i z i / k a z u h a

P M 3 : 0 0

「和葉！服部にはチヨコ渡したん？」

「なっ何言つとんの、香奈！まだに決まってるやん！」

放課後、同じ合気道部の香奈に痛いところをつかれた。
アタシ・・・まだ平次にチヨコ渡してないんや・・・。

毎年、毎年チヨコレートを渡しているので馴れっこのはずだけど・・・。

合気道の部活の最中、先輩の松山さんに話しかけられた。

「なあ遠山、本命と違ってええからバレンタインにチヨコくれへんか？」

「へ？・・・でも・・・。」

「やっぱり服部だけにしかあげられないんやな？」

「なっ何言つとるんですかつ！！！そんなわけありません！いつもお世話になつとるし、先輩にチョコ作ってきます！」

・・・そんなわけで先輩にチョコ作つてくることになってしもつた。まあ毎年、合気道部の人たちには義理チョコあげとるし・・・かまわへんよね？

きつと・・・

「やっぱり今年は本命？本命なん、和葉あ」

「・・・出来れば・・・やっぱりその方がええと思うけど・・・」

先輩にチョコあげるんやもん。

本命以外あげちゃうと、あげる奴に悪いし・・・

やっぱり今年も、幼なじみとしてのチョコあげるしかないんかなあ・・・。

平次、やっぱりモテてチョコたくさん貰ったらしいねん。
そんなかには、転校して来たごっつかわええ女の子もいるらしいし・
。。。

「よう和葉！こんなところでどないした？」

合気道の帰り、幼なじみの色黒男とバッタリ出会った。
・・・と言ってもアタシが、ずっと待ってたんやけど。

「別にい。合気道部の松山さんにチョコあげるからまっとするだけや。」

「・・・え？」

和葉が？わざわざ待ってチョコあげるやと？

「平次？どないしたの？」

「いついやゝ何でもないわ！そうかあげるんか！おめでたいわ！ほな、がんばってなあ！」

言葉が空回りする。

動揺している自分に気がついた。

・・・なんや。

どこの馬の骨が分かん先輩にあげるやと？

嫉妬心。

自分で気がついてさらに焦った。

「アホ！義理やで、義理！」

「何や・・・本命とちがうんか・・・だったら・・・。」

「・・・え？」

「俺以外の奴に、あげるなや・・・。」

⌈
•
•
•
!
⌋

顔が紅潮していることに気がついた。慌てて顔を振り、ごまかす。

「いやいや、べつ別に深い意味はないで！！本命以外はあげるなや
って意味や！」

その……俺は幼なじみやからなあ！貰って当然やし……な！」

「あっ当たり前やん！はい、チョコ！」

義理・義理・義理・義理・義理・義理・義理・義理・義理・義理・

呪いのようにリボンには、『義理』という文字が書かれていた。

「何やこれは！！こんなふざけたチヨコ貰いとうないわ！ボケ！」

「なんやと！推理アホにはちようどええわ！」

ずっと二人で追いかけていた。

その日紅葉は・・・やはり平次にしかチヨコレートは渡さなかった。

愉快的放課後。今日はバレンタイン。

heizi/kazuha（後書き）

作者の桜草です。

この話では初めての後書きですね！

本来ならばバレンタインで完結させるはずの話でしたが・・・間に
あいませんでした（泣

ですのでバレンタインウィーク（バレンタインから7日間）までに
完結させたいと思います！

バレンタインの日・・・自分は、必要以上に男っぽいので自分では
あげずに、友達から結構チョコ貰いましたよ・・・。

男よりカッコイイという理由で・・・（ネタにしましたが
こう見えても女なんですけど！

ってことでまた次回！

（たくさんさんの小説が投稿されていた事は、エラーですへ汗 ご迷惑
をおかけしました。）

「よし、修理は完了じゃ！これで通常通りはしれるぞ！」

俺は、博士の家でスケボーの修理をしてもらっていた。

当然あいつも目に入ってくる。

修理には少しも興味がないうつで、どこかに目をやっている。

切れ長の眼が、こちらを向いた。

「あら・・・名探偵さんは小さくなってもモテるのね。」

彼女がそういったのは、机の上にある大量のチョコを見たせいであろう。

「バー口悪いかよ・・・ところで灰原。」

「・・・何？」

「お前はチョコ・・・いや何でもない」

言いかけてやめた。

お前はチョコ、あげたことあるのか？

答えは聞かなくても分かつてる。

『馬鹿ね・・・そんな事あるわけないでしょ？』

ハ・・・当たり前だよな・・・

有り得ないことを聞いて、何かを期待してたのか？

自分自身でも分からない。

近頃・・・自分はきつと変だ。

そう感じる。

「あ・・・学校に忘れ物しちゃったわ・・・江戸川君、付き合ってくれる？」

「はぁ？何で俺が？」

「女がこんな真夜中、一人で外歩くなんて物騒でしょ・・・。」

切れ長の瞳がジッと俺を見る。
怖い・・・

とても断りきれなかったので、一緒に学校へ行く事にした。

やっぱり夜中は寒い。

コートの一つぐらい、持ってきたほうが良かったかな……。

「こんな真夜中だから……幽霊くらい出てきてもおかしくねーよな？」

「あら……変質者の方が出てきそうね……。」

「……。」

とても男女の会話とは思えない。

……もつと夢のある話くらいしたっていいじゃねーか。

そんなに俺のこと、嫌いかよ。

「なあ灰原、忘れ物って何？」

「……さあ？当ててみる？」

おいおい……まさか薬……とかじゃねーだらな？

何だかんだ言っている間に、学校へ着いてしまった。
さすがに真夜中のバレンタインデー。警備員は、居なかった。

「ちょっと待ってなさいよ。取って来るから。」

「いい。俺も着いてくる。」

「・・・勝手にして。」

・・・最近、ずっとそうだ。

あまりにも灰原は俺に対して、冷たい。
何か悪いことしたか？

星空を見上げる。

永遠にここに居られるような気がした。

どれくらい待っていただろうか。

「工藤君、大丈夫？持ってきたわよ。」

「え？あ、ああ。」

ぼーっとしていた。
眠っていたような気もした。

「・・・で、何もって来たんだ？」

「あ、ちょ！」

ドサッ

薄いピンク色の箱に、赤いリボン。
手のひらサイズの小さな箱。

・・・え？

「はい！」

「え？ なっ何だよ？」

「だから！これ・・・バレンタインの・・・その、彼方にあげよう
かと思って・・・
学校に忘れてきちゃったから・・・。」

嘘だろ・・・？

灰原が、俺に・・・チヨコを？

普段のそっけない冷たい態度から見て、嫌われていると思ってた。

ましてやこんな・・・

「いつ言っておくけど、義理よギ・リ！！勘違いしないでよね！」

「・・・ああ、分かってる。ありがとう灰原。」

「わっ分かればいいの・・・。」

怒っているのか、彼女の頬は赤く紅潮していた。

義理でも・・・俺のことを思っ作ってくれたのは確かだ。

自分のために、自らを犠牲にしようしたこと・・・

彼女の優しさが、思いがけず頭に蘇ってきた。

もし・・・もしもだ。

俺の中の《工藤新一》が存在しなくて・・・ただの小学生の・・・

《江戸川コナン》だったら・・・俺は・・・。

『守ってくれるんでしょう？』

「・・・どうしたのよ江戸川君。」

フツと微笑み、星空を仰いだ。

「いや・・・何でもない。」

大切な人を、守りたい。

工藤新一でも江戸川コナンでも・・・

ずっと見つめていた。

二人で・・・。

切ない夜に。今日はバレンタイン。

c o n a n / a i (後書き)

作者の桜草です。

何やらエラーですよ、エラー・・・。

平次×和葉の部分がたくさん投稿されていました!?

(投稿完了画面が出なくて焦って何回も投稿してしまい・・・。
不具合があったそうで、直してくれるようです)

良かった・・・。

たくさんの読者様にご迷惑をおかけしました。
お詫び申し上げます。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6575d/>

スウィートLOVEバレンタイン

2010年10月10日18時23分発行